



114
A2799
1



東京タイムス新聞抄譯一千八百七十七年
 倫敦支那電報新聞ハ細心熟慮ノ現ニ日亦行
 ハル、域外法權ノ主旨ヲ討論セリ今其一篇ヲ
 摘テ之ヲ本紙中ノ別所ニ登録セリ抑今日ニ當
 リ斯ノ如キ論說ヲ惠贈スルノ友情ニ至テハ固
 ヨリ之ヲ領セサルヲ得スト雖氏西方ノ論者ハ
 此論題上一ニ、要點ヲ細察セサルノ狀アルヲ
 如何センヤ夫レ日本支那土耳其及其他ノ數國
 ニ於テ一ニハ文化進歩ノ程度相似タリトナシ
 ニニハ外國裁判權ノ組織ニ於テ異同ナシトナ
 シ此數國ヲ合セテ同一ノ着ヲ下スハ世人ノ慣
 習トナリタリト雖氏此等ノ見解一モ其當ヲ得

八八
限正
候十一年
爵郵寄四
附月

4224



ル者ニエラス試ニ歐米ノ人ニ問ヘ日本ノ國勢
遠ク土耳其格支那比耳西暹羅及巴々利諸邦ノ上
ニ位スト答ヘサル者ナカルヘシ且外國ノ日本
ニ需メアル亦他ノ數國ノ比ニアラサルハ深ク
究問ヲ費サスノ容易ニ知ルヲ得ヘキナリ譬ヘ
ハ比耳西ノ如キ孰カ日本ト信用ヲ同ウスト云
フ者アラシヤ果シ然ラハ特ニ比耳西ニ優等ノ
裁判權ヲ許與セシ一事ニ至テハ知ラス何ノ本
ク所アツテ能ク之ヲ辨護セントスル乎夫ノ拷
問ノ事ノ如キモ亦一班ノ意見ニ止ラサル者ア
リ日本政府嚮キニ拷問ノ法ヲ禁止スルニ方リ
自ラ甘シテ世人多ク知ラサル所ノ艱難ヲ冒シ
タリ蓋シ日本官吏ノ才幹アル者一モ拷問ノ非

道ニノ且其實益ナキヲ知ラサル者ナシ然リト
雖氏人民ハ素ヨリ恐クハ下等ノ官吏ニ於テモ
因襲ノ久キ遂ニ此法ヲ認テ囚徒ヲ罪ニ伏スル
ノ一手段トナスノミナラス又以テ一ノ罰目ト
ナスニ至レリ但シ此法ノ無用ニノ且伏罪ヲ強
逼スルノ效ナキハ政府各省ノ人皆之ヲ明識セ
サルナシ故ニ若シ人心ヲノ此法ノ別ニ主要ナ
キトヲ知ラシメハ之ヲ廢止スルノ擧數年前ニ
出ルモ何ノ難キトアラシヤ唯突然拷問ヲ廢シ
之ニ代ユヘキ刑罰ヲ設ケサルハ人ヲシテ罪
ヲ畏ルノ心ヲ消セシムルノ弊ヲ來タサンコ
ト恐レシナリ抑從來ノ法嚴酷ナルヲ視テ人民
擧テ其無用ニシラ且不當ナルヲ答ムルノ時ニ

十卷首

際シテモ仍ホ俄ニ其法ヲ廢スルノ不便ナルハ
是レ西方諸國ノ固ヨリ信知スル所ナリ現ニ管
刑ノ如キハ一種ノ拷問ナリト雖氏合衆國ハ今
日ニ至ルマテ處々ニ於テ之ヲ施行セリ而ノ英
國モ亦未タ全ク之ヲ廢セサルナリ且印度ハ英
國ノ政權ニ屬シ英國ノ化ヲ受クルト雖氏古代
蠻俗ノ拷問屢國中ニ行ハル故ニ我輩切ニ望ム
日本能ク夫ノ女神ミチルガワノ如キ智識ノ改
革ヲ施行シ先ツ其大体ヲ全整シ機ヲ視テ速ニ
之ニ應スルニ至ランコトヲ見ヨ他國ノ改革ハ何
レモ徐々序ヲ逐セ精勵怠ラス以テ漸次ニ完成
セシ者ナルコト固ヨリ日本ハ徒ニ新奇ヲ事ト
シテ以テ聲譽ヲ博セントスル者ニアラス蓋シ

其期スル所ハ善ク内事ヲ進捗シテ今ヤ該國既
往將來ノ措置ヲ批評スル彼ノ列國ト相並立ス
ルニ至テ始メテ自ラ足レリトスルニ在ルヘキ
ナリ

日本ノ域外裁判法

外國ノ日本ト訂盟スルヤ條約中域外裁判ノ法
ヲ置キ外國ノ人民ヲ日本ノ管轄ヲ脱シ各其
自國ノ政令ニ從ハシメタリ是ヲ以テ日本人常
ニ不快ノ念ヲ抱ク者茲ニ數年抑此措置ノ酷ナ
ル固ヨリ論ヲ俟タス蓋シ一々此法ヲ設クレ
ハ獨立ノ國体多ク之カ為メニ侵凌ヲ受ク但シ

此法アル亦勢ヒ然ラサルヲ得サル所アリ姑ク
實事ニ就テ之ヲ論スレハ日本支那土耳其及其
他ノ數國ニ至テハ其舊來ノ國法ヲ一變スルニ
非レハ真ノ外交ヲ脩スルノ域ニ至ラス故ニ日
本モ亦土耳其格支那ノ如ク夫ノ一制度ノ為ニ其
國体ヲ蔑如セララル、ニ至レリ是レ亦自然ノ理
ナリ而シテ日本國ハ屢々方畧ヲ運ラシテ此法
ヲ除却センヲ要シ現ニ精神ヲ費ヤシテ法律ノ
整頓ニ從事シ能ク自家ノ短所ヲ視察シテカ、
テ之ヲ改進スルヲ見レハ其見識遙カニ隣邦ノ
上ニ出ルヲ知ルベキナリ見ヨ日本ハ法律改正
ノ急務タルヲ察シ目今頻リニ外國ノ法律ニ
基キ其國法ヲ定ントセリ豈噴歎セサルヘケン

ヤ我輩ハ頃口到着ノ郵便ニ由テ依テ可キ一新
報ヲ得タリ云ク日本ハ拷問ヲ廢止スルノ命ヲ
發シタリト蓋シ拷問ハ記臆スヘカラサル舊時
ヨリ日本ニ行ハレタルヲ猶支那及他ノ亞細亞
諸邦ニ於ケルカ如シ故ニ日本若シ司法上ノ事
ニテ外國ト對立セント欲セハ其法制ノ中ニ即
テ先ツ此ノ一惡弊ヲ除棄セサルヘカラス獨リ
怪ムヘキハ此事頗ル樞要ニ涉ルト雖ドモ從來
外國ノ論者ニシテ支那日本ノ條約中域外裁判
ノ條款ヲ廢セントスル者敢テ意ヲ此ニ注カス
否意ヲ注カサルニアラス寧ロ之ヲ不問ニ付ス
ルヲ以テ便ナリトセシ者ノ如シ尤モ熟々此兩
國ノ法制ヲ見ルニ至惡ノ弊ハ支那ノ裁判上ニ

行ハレ拷問ノ法ハ支那日本共ニ用ヒラレ之ヲ
以テ治罪ノ要具トナスヲ見レハ假令域外裁判
法ヲ除却セント云フ者アリト雖氏首トシテ是
等ノ弊害ヲ蟬脱スルニ非サレハ各國人民ニ於
テハ決シテ此兩國ノ法度ニ信服セザルヘシ但
シ數百年來因襲ノ弊ナレハ一朝遽ニ其非ヲ覺
悟セシメント期スルモ得ヘカラストノ口實ヲ
設クル者モ必ス之アルヘシ然リト雖氏此口實
ノ如キハ畢竟我輩カ實際ノ事情ニ通セサルノ
失ト今一層優等ナル文明ノ措置ヲ施サ、ルノ
失トヲ蓋フ者ニアラサルナリ今ヲ距ル一年前
日本政府ハ其條約ニ即テ域外裁判ノ條款ヲ廢
セント欲シ公然合衆國政府ニ對シ其議ヲ發セ

シニ當時合衆國外務卿明カニ之ニ答ヘテ日本
ノ法制未タ完全ナラサルカ故ニ其要請ヲ許諾
スル能ハスト陳ヘタリ蓋シ日本ハ勉強ヲ以テ
善ニ進ムノ状アレハ宇内文化ノ進歩ヲ喜フ所
ノ人ハ皆日本ヲシテ能ク其法制ヲ改革セシメ
依テ以テ獨立ノ國体ヲ全フセシメント冀望ス
ルナルヘシ今外國ヲシテ夫ノ現行ノ法ニ據テ
負擔スル裁判ノ責任ヲ解カシメンニ皆欣然タ
ラサル者ナカルヘシ抑外國ノ域外裁判ヲ行フ
ヤ領事館常費ノ外別ニ費用ヲ増加スルノミナ
ラス開港場ノ稍繁盛ナル處ニ到テハ法廷ヲ設
置セサルヲ得ス而ルニ土人ノ賠償ヲ外人ニ受
ントシテ我裁判所ニ來リ訴ル者裁判ノ公平至

當ナラサルヲ懸念スルカ爲ニ屢不知ヲ兩國人
民ノ間ニ生スルノ不利アリ故ニ苟クモ外國人
ヲシテ日本國ノ裁判所ニ於テハ公平至當ノ所
斷ヲナスコトヲ信知セシメハ彼ノ域外裁判法ヲ
除却スルニ於テ誰カ敢テ抗議スル者アラシヤ
況ンヤ日本能ク事ヲ處スルノ要旨ヲ曉リ其法
制ヲ改革シテ以テ訶訟ヲ受理セント欲スルノ
意アルニ於テヲヤ是ヲ以テ知ルヘシ日本ノ支
那ニ超越スル者許多アル内法權ノ事ニ於テモ
亦復然ルコトヲ支那モ亦域外法權ノ管束ヲ蟬脱
セント欲シ屢歎詎シタリト雖氏未タ彼ノ殘刻
ニシテ且具備セサル自家ノ裁判法ヲ改制スル
ノ擧ニ着手セス素ヨリ自ラ奮躍シテ先ツ自己

ノ責任ヲ盡クスニ非サル以上ハ如何ソ開化國
ノ權利ヲ占受スルヲ得ヘケンヤ故ニ漫ニ小兒
ノ如ク無用ノ罵語ヲ吐クコトヲ停メ一ニ日本ノ
先例ヲ踐行シテ可ナリ
日本帝國カ道德ト藝術トノ改進ヲ謀リ心ヲ勞
シカヲ用フルノ懇切ニメ且勤勉ナルヲ稱可ス
ルノ決斷ヲ以テ新聞紙ヲ發行セントセハ須ク
今ノ時ヲ以テ便ナリトスヘシ況ンヤ新年ハ世
運安寧國事整頓外交モ亦親睦
皇都ヲ東京ニ遷シテヨリ以來未タ曾テ此ノ如
キアラサルナリ曩ニハ憂フヘキノ時アリ歎ス
ヘキノ時アリ又地方騷擾ノ時アリ當今漸ク其
甚恐ヘキ者ニ非リシヲ知ルト雖氏又政府圖ヲ

達スルノ進路ヲ遮斷シ或ハ輔相事ヲ誤ルノ誹
謗ヲ來タスニ足リシ者ナキニシモ非サリシナ
リ是ノ一時ノ困厄アルニ當テ外國ノ論者概ネ
其原因ヲ誤解シ其弊害ヲ過慮ノ餘リ之ヲ以テ
一大凶兆トナス者アリ然ルト雖氏爾來未タ曾
テ災害ノ踵テ到ルヲ見サルヨリ是等ノ論者ヲ
シテ苟モ大ニ國情政体ヲ變革スルノ時ニ當リ
多少地方ノ騷擾ヲ醸スハ勢ト免ルヘカラサル
ノ事タルヲ明知セシムルニ至レリ且過般ノ事
便利ヲ塞キ艱難ヲ遺スハ固ヨリ他ノ騷亂ト其
状ヲ相同ウスト雖氏之ヲ以テ政事上ニ謬誤ア
ルノ證トハ為シ難ク又取テ國難ノ徵候ヲ表
出セル者ニハアラサルナリ而モ既往ノ騷擾ノ

如キハ何レモ皆神速ニ鎮定シタリ但シ最後ノ
一擧ノ如キハ余輩未タ其如何ヲ論スルヲ得ス
ト雖氏若シ萬一將來復タ此類ノ事アルニ遭遇
セハ論者宜ク先ツ其事ノ實況ヲ確察シ漫ニ凶
兆ノ名ヲ附スルナクハ可ナラン
當今ノ世体ヲ察スルニ彼ノ暫時ノ騷擾ハ一モ
毒烟ヲ遺スナク我輩眼光ノ達スル所滿目瞭然
光景清朗タリ曾テ艱難ニ逢遭セリト雖氏既ニ
能ク之ヲ鎮壓シタルカ故ニ反テ執政家ノ謀略
適中シ所置巧妙ナルノ實ヲ表シ隨テ世上ノ信
用堅ク定マリ又動カスヘカラサルニ至レリ畢
竟國事ヲ改革スルカ為メニ往々不慮ノ擾動ヲ
醸出セリト雖氏未タ曾テ其禍ヲ後ニ遺サス余

輩豈ニ之ヲ嘆美セザルヘケンヤ況ヤ維新政府
ノ功績ヲ表スルノ善兆簇々トモ現出シ之ヲ賀
セサルヲ欲スルモ得ヘカラサルニ於テヤ今
姑ク内國ノ事ヲ措キ專ラ其外國ニ関スル所ノ
事ニ就テ之ヲ論センニ宇内ノ人心ヲ感動セシ
ムルノ擧亦鮮少ナラス蓋シ其事タル概テ功ヲ
成サ、ルナク而モ其功ノ粲然タル者居多ナリ
然ルニ世ノ論者中前四年間日本ニテ施為セシ
美擧此美擧タル帝ニ日本ノミナラス大ニ各國
ニ關スル所アリヲ將テ時運ノ然ラシメシ所ト
為ス者往々少ナカラス固ヨリ余輩ハ其然ラサ
ルヲ知レリ世ノ異見ヲ抱ク者ハ云ク日本ノ
事ヲ成スヤ好運其友トナツテ常ニ之ヲ看護ス

故ニ其ノ為ス所國力ニ由ル者ナシ夫ノマリヤ
ルリス船ノ事ニ於ケル日本政府能ク馮港ノ奴
隸商賣ヲ廢絶スルヲ得タルハ好運ノ日本政府
ヲ助ケタルナリ支那朝見ノ事ニ於ケル各國ノ
公使之ヲ整理スル能ハス而シテ大使副島氏之ヲ
裁定セシハ好運ノ副島氏ヲ救ヒタルナリ臺灣
ノ蠻民ニ於ケル他國ノ軍兵ハ之ニ戰ヒ勝テ能
ハス而シテ西郷之ヲ征服シタルハ氣運ノ西郷ヲ
保庇シタルナリ北京ノ談判ニ於ケル他國ノ公
使ヲシテ之ヲ為サシメハ或ハ數月ノ光陰ヲ費
ヤスモ仍ホ之ヲ定ムル能ハス而シテ大久保氏ハ
宇内至頑ノ政府ヲ數週日間ニ論服シ條約ヲ
訂結シタルハ運命ノ反轉ノ大久保氏ヲ輔翼シ

之ニ依テ終ニ朝鮮、如キ國情至難世人未夕馭
スル能ハサル所ノ國ヲ関ニ日本ト其使節黒田
氏トヲメ兩ナカニ雄名ヲ奔馳セシムルニ至リ
シナリト但シ我輩ハ斯ノ如キ怪論ノ業ニ既ニ
其跡ヲ斷チシコトヲ信スルナリ何トナレハ如此
意義ヲ以テ説ヲ立ルノ徒ハ現ニ事物ノ成果ニ
由テ其説ノ非ナルコトヲ黙々ノ中ニ覺悟シタ
ハナリ請フ後來日本ノ措置ヲ論セン人ハ宜ク
謹慎ヲ加ヘ妄リニ臆説ヲ立ル勿レ日本ノ事業
ヲ噴美スルノ情ハ既ニ世人ノ肺肝ニ銘セリ故
ニ何等ノ謬見ヲ下スト雖凡何等ノ誹謗ヲナス
ト雖凡決シテ之ヲ動カスコト能ハサルナリ
前論トハ趣ヲ異ニシ未夕充分世ニ知ラレサル

一事アリ即チ近來日本ニテ才藝發達ノ道ヲ開
キタルノ擧是レナリ蓋シ此一事ノ如キモ亦當
ニ世人ノ感嘆噴美ヲ要メサルヘカラサルノ美
擧ト云フヘシ曩キニハ兩度ノ萬國大博覽會ニ
於テ其手藝ト機械術ノ進歩ヲ示シ世人ノ稱揚
其實ニ過クル者アルニ至レリ然凡其名實相適
スルニ至ルハ多年ナラスメ待ツヘキナリ抑日
本ノ攷々トメ少年ノ教養ヲ勤メ工業ノ改良ヲ
謀リテ以テ國民ヲ利セントスルノ擧ハ目今ノ
所世間未夕其實ヲ詳ニセスト雖凡漸次世ノ高
評ヲ得ルニ至ルハ素ヨリ言ヲ待タス今ヤ海外
諸國ノ日本ヲ待スルノ状見ルニ之ニカヲ添
ユルノ情ニ於テ稍々懇切ナラサル所アリト雖

氏早晚日本國ノ功績ヲ公認スルニ至ルヤ必セ
リ蓋シ日本ハ預メ之ヲ期ル者ノ如シ然ルニ
或者ノ云ク日本ハ深ク自信ノ心ヲ以テ外國ノ
承認ヲ期シ從前施設セシ所ノ諸事ニ於テモ亦
頗ル得色アリト然氏日本豈ニ從前ノ施設ヲ以
テ得意トセサルヘケンヤ試ニ或者ヲノ十二年
前ノ日本ト今日ノ日本トヲ比較セシメハ其國
勢變遷ノ狀ノ奇異驚クヘクノ且其措置ノ英斷
雄略ニ出テタルハ實ニ思想ノ及フ所ニアラサ
ルヲ知ルヘキナリ我輩ハ其實況ヲ言フヲ要
セスト雖氏今爰ニ其概略ヲ述ヘン當時政府ノ
紀綱ハ萎靡ノ振ハス人民ハ皆苦難ニ陷溺セシ
ニハアラサレ氏封建ノ強壓ニ由テ志ヲ自由ニ

達スルノ望ヲ絶テ内ニハ國亂ノ將ニ起ラント
スルヲ憂ヘ外ニハ新奇ノ艱難アルヲ歎キ全國
ノ精神全ク消滅シタルカ如シ然氏今日ニ至テ
ハ宇内ノ列國ト交誼ヲ親密ニシ國內ノ少壯ハ
教育及自由ノ曙光ヲ仰キ學藝ハ近時之ヲ改良
シテ以テ國內ニ施キ及ホシ執政家ハ深ク其責
任ヲ盡シ勇進勉強シテ各其職ヲ守リ任ヲ慎ミ
善ク事ヲ決斷ス故ニ一時不慮ノ事起ルモ敢テ
動搖ノ色ナク將タ一朝ノ成功ニ由テ妄リニ自
大ノ心ヲ生セス常ニ確乎トシ其意ヲ達セン
ヲ是レ勉ム此レ日本當今ノ形況ナリ固ヨリ該
國ノ表號タル太陽ノ中モ多少ノ汚點ナキ
ラス之ヲ看出セト要スル者ハ請フ自ラ其所

外省

在ヲ搜索セヨ余
亦早晚其活點ヲ發見スル
ノ意アリト雖氏今ヤ新年
初ニ際シ萬民舉テ
大吉祥ノ象ヲ初賀スルノ時ナルヲ以テ余輩モ
亦特ニ日光ノ粲然タル所ノミヲ擧ケテ爰ニ閣
筆ス